

Title	嘘と食欲：西欧中世の商業・商人観
Author(s)	大黒, 俊二
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/921">https://hdl.handle.net/11094/921</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	おおぐろしゅんじ 大黒俊二
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第18920号
学位授与年月日	平成16年4月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	嘘と貪欲—西欧中世の商業・商人観—
論文審査委員	(主査) 教授 江川 温 (副査) 教授 竹中 亨 教授 藤川 隆男 名誉教授 川北 稔

### 論文内容の要旨

本論文は、西欧中世においていつ、いかにして、商業や商人が社会にとって必要かつ有益な存在として受け容れられていったのかを、イタリアの史料を中心に研究している。400字詰め原稿用紙換算で約490枚の規模で、「付録1」「付録2」に13世紀スコラ学者でフランチェスコ会聖霊派に属したピエール・ド・ジャン・オリヴィの『契約論』抄訳、『自由討論集』第一巻抄訳を収めている。

「はじめに—視点・史料・方法」では、こうした課題を追及するための大枠を設定する。商人蔑視とそこからの解放過程を追うという「視点」、スコラ学文献、教化史料、商人文書という三種類の「史料」、中世人が商業・商人を語る際にしばしば用いた定型句(トポス)に注目するという「方法」が提示されている。また「序章 嘘と貪欲」では、「嘘と貪欲」、「必要と有益」というトポスを中心に、中世後期、商業・商人へのまなざしが蔑視から賞賛へ、拒否から受容へと変容していく軌跡をたどっている。

「第1部」では、ピエール・ド・ジャン・オリヴィを中心に、13世紀スコラ学における商業・商人観の変容を二つの視点から検討していく。「第1章 徴利禁止の克服をめざして」では、13世紀スコラ学者たちが、金銭貸借にともなう利益取得を禁ずる原則は維持しながら、損害賠償論と投資貸借論を活用して柔軟に対応していく過程を概観する。「第2章 石から種子へ」では、オリヴィが徴利禁止の重要な根拠の一つを、「種子的性格」という概念を手がかりに突き崩し、徴利禁止論を大幅に緩和したとする。「第3章 公正価格と共通善」では、オリヴィが価格と価値の関係を問う公正価格論において、当時のスコラ学者と同じく「共通善」概念を援用しながら、この概念にひそむ可能性を最大限掘り起こすことによってきわめて大胆な解釈を導いたとする。またオリヴィにおける「共通善」の含蓄を見分けるには、日本語への翻訳という作業が貴重な手がかりとなる点を指摘する。

「第2部」では、スコラの経済論と現実の商業世界が教化の場での出会い、商業・商人観が変容していくありさまを、説教史料という側面から概観している。「第4章 托鉢修道会と新説教」では、説教史料についての現在の学界の知見を紹介している。「第5章 ベルナルディーノ・ダ・シエナと商業・商人観」では15世紀のフランチェスコ会厳修派の説教師ベルナルディーノの商業・商人のモラルについての語りを紹介しつつ、重要な論点を筆録説教、範例説教について比較し、自己検閲という教化の場に特有の観念変容のあり方を明らかにする。「第6章 ベルナルディーノ・ダ・フェルトレとモンテ・ディ・ピエタ」では、同じく15世紀の同派の説教師ベルナルディーノ・ダ・フェルトレが公益質屋(モンテ・ディ・ピエタ)の設立を呼びかけるに際し、モンテの取得する $+\alpha$ は徴利ではないと主張してスコラ学の概念を巧みに操作する様を描いている。

「第3部」では商人文書から商人の意識と行動におけるスコラ学説の内面化のありかたを探る。「第7章 為替と徴利」では為替を用いた徴利隠しの手口を紹介し、これを徴利ではないと主張する商人たちの自己を偽るがごとき言動に注目し、さらにスコラ学者もこれを追認したことを指摘する。「第8章 コトルリ、ペリ、サヴァリ——「必要と有益」から「完全なる商人」へ」では、「必要と有益」というスコラ学由来のトポスが商人層に浸透していくさまを、15世紀から18世紀にかけてのイタリア、フランスの「商売の手引」から跡づける。そしてそれは商人層内部の階層分化や人文主義の影響を受けてさま変わりし、「完全なる商人」という理念に鑄直されたと緒論する。

### 論文審査の結果の要旨

近代資本主義の発展要因について、マックス・ウェーバーや彼を批判したリチャード・ヘンリ・トーニーはいずれも、中世の神学者は経済的利害の追求そのものは許容されうるとしてもそれは道徳によって制約されねばならないと考えていた、と述べている。大黒氏の論文は、彼らが前提とする中世のカトリシズム商業論にも複雑な構造と歴史的発展があることを示そうとしたものと受け取ることができる。

オーヴィの商業思想、中世後期の説教と説教資料の諸問題、フランチェスコ会厳修派の説教における商業論、いわゆる『商人手引き』に見られる商人自身による商業論、これらはいずれも日本の西洋史学界では本格的に扱われたことのないテーマであり、筆者の開拓者としての功績は大きい。また教会エリート思想と商人の自意識を両端に置き、その間に文化的仲介者としての説教師の思想と言説を置くことで、中世後期商業イデオロギーの社会的存在形態を把握したことも、大変重要な達成であると思われる。なお大黒氏はつとに名文家として知られるが、この論文の文章も読者をつかんで離さない魅力がある。

もちろん、この論文も若干の問題を残している。まず全体として論争に対しやや消極的であるように思われる。先行研究の問題点をより明確に指摘し、筆者自身の分析視角および方法が持つ独自性と有効性を強く主張することが望まれる。またカトリシズムの教説とは別に、農業が支配的な社会の根底に潜む商業蔑視、反商人意識の継続的な作用にもそれなりの位置づけが必要であるように思われる。説教活動について言えば、世俗の富を修道会が保持することにとりわけ批判的であった厳修派がなぜ俗人の商業活動や徴利について寛容であったかというかねてからの難問は、この論文においても十分な解決が与えられていない。また厳修派と他の托鉢会派の説教活動との違いについても説明がほしい。徴利を隠蔽する手段としての為替のシステムについては、前近代特有の経済条件に関してやや説明不足のところもある。全体論旨を集約する結論も、独立の章として置くべきであろう。

しかし、以上のような瑕瑾は、今後多少の論述の整理、補筆を行うことで、大部分解消されるものと思われる。本論文は前近代ヨーロッパの経済思想、経済倫理に大きな貢献を行ったものであり、これを博士（文学）の学位にふさわしいと認定する。